

2020年1月12日（日）13:00-18:00

慶應義塾大学日吉キャンパス

来往舎1階 シンポジウム・スペース

申込不要・入場無料

交通と文学

鉄道の時代としての19世紀

◆ 発表者 ◆

木島菜菜子（イギリス文学／平安女学院大学）

「ディケンズと鉄道再考 — 魅力、幻影、恐怖」

大楠栄三（スペイン文学／明治大学）

「鉄道と風景 — 1868年世代のスペイン小説において」

乗松亨平（ロシア文学／東京大学）

「私的なものの侵犯＝生成 — トルストイと鉄道をめぐって」

◆ コメンテーター ◆

小倉孝誠（フランス文学／慶應義塾大学）

奥山裕介（デンマーク文学／大阪大学）

◆ 司会 ◆

西尾宇広（ドイツ文学／慶應義塾大学）

【第一発表／イギリス文学】

「ディケンズと鉄道再考－魅力、幻影、恐怖」

木島葉菜子

19世紀英文学研究の碩学キャサリン・ティロットソンは、「ディケンズは間違いなく、鉄道を想像力を持って捉えた、最初のヴィクトリア朝作家の一人である」と述べている。この評価は、1846年から48年に書かれた小説『ドンビー父子』における鉄道の描写を念頭において下されたものである。この時代、イギリスの交通を革命的に変えた鉄道は、文学にどのような影響を与えたのか。本発表は、歴史的背景を簡単に確認した上で、上述の賛辞を得たディケンズに焦点を当て、鉄道がその想像力に及ぼした影響について『ドンビー父子』と中期のエッセイをもとに、また、鉄道がかき立てた恐怖について短篇『信号手』に言及しながら考察することで、これまでに論じられてきたディケンズと鉄道のテーマを再考し、鉄道が文学にもたらしたインパクトを広く議論するための素材をいくつか提供しようと試みるものである。

【第二発表／スペイン文学】

「鉄道と風景－1868年世代のスペイン小説において」

大楠栄三

鉄道が開通した当時、初めて乗客となったスペインの作家たちは、その体験をいかにフィクション化したのか？ ロマン主義作家ベッケルの『わが僧房より』（1864）といった先駆的な試みもあったが、鉄道の旅をモチーフとしたのは、1868年世代をリードしたベレス＝ガルドスの未発表小説『ロサリア』（1872?）が最初だろう。ただ刊行されたものとしてはバルド＝バサンの『新婚旅行』（1881）となる。本作には、登場人物が車窓から「すばやく動く風景」に関心をもって眺めるシーンが現れる。この「動く風景に対する感受性」こそが、スペイン・リアリズム小説を代表するクラリンの『裁判所長夫人』（1885）とガルドスの『フォルトゥナータとハシント』（1887）の中に、スペインの田舎の景色や風物を描かせていったのだ。

鉄道の旅に対するこのような感性の変化を、19世紀末からバルド＝バサンの最後の小説『愛しの主』（1911）までたどってみたい。



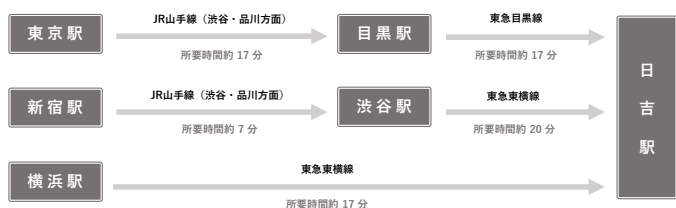
【第三発表／ロシア文学】

「私的なものの侵犯＝生成－トルストイと鉄道をめぐって」

乗松亨平

『アンナ・カレーニナ』（1875-77）、『クロイツェル・ソナタ』（1889）という、19世紀を代表する「鉄道小説」を著したトルストイは、しかし鉄道を憎んでいた。両小説でも鉄道は否定的イメージに彩られている。皮肉なことに、そんなトルストイの最期は、妻との不和の末に家出し、田舎の鉄道駅で客死するというものであった。ただし、それは人知れぬ寂しい最期などではなく、文豪危篤の報に駆けつけた記者たちが駅舎を取り囲んだ。死という人間の最も私的な経験が、逐次、公にされたその最期は、近代における公／私の相即性を如実に表しているだろう。本発表では、『アンナ・カレーニナ』と『クロイツェル・ソナタ』における鉄道を、同様に、公的なものによる侵犯をとおして私的なものを生み出す機関として読解したい。

❖ 交通アクセス ❖



⑨ 来往舎